

5-2

施設における機能訓練の役割

オムツ交換からトイレ誘導までの機能回復への取り組み

生活リハビリ

個別ケア

特別養護老人ホーム フレンズホーム

介護支援専門員 古谷亜子

副主任 渡邊久子

東京都世田谷区下馬2-21-11

副主任 関屋忠治

TEL: 03-3422-7211

E-mail kobori@n-friends.or.jp

FAX: 03-3422-7227

URL <http://www.n-friends.or.jp/>

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

世田谷区の住宅街の中にあり、1990年より高齢者事業を開始し、特別養護老人ホームは定員65名、ショートステイ定員4名からなる、地域の高齢者の身近な存在として、安心して穏やかな終末期を迎えられる施設サービスをめざしています。

〈取り組んだ課題〉

- 見守り歩行されていた入居者が、転倒し、右大腿骨頸部骨折をし、入院となる。しかし、認知症のためリハビリ不可能とのことで、そのまま退院。その時に大転子部分に褥瘡できていた（3cm×3cm）。
- 体重がある為、褥瘡悪化の危険が高い。
- ベッド上で使いじりあり。ベッドより、すり落ち、転落があった。
- 尿意、便意の訴えは時々あった。
- 退院後のADL向上の必要性。

〈具体的な取り組み〉

- 臥床→車椅子への移乗時、介助の流れの中でリハビリを行う。
 - ・ 側臥位からの起き上がりの練習
 - ・ 端座位の練習
 - ・ 立位保持の練習
- 車椅子使用时、尿意、便意の把握
- ハード面での環境改善
- リハビリを担当制で行い、情報収集して分析する。
- 定期受診の際に、患部の状態確認。
- 家族への説明、同意を得る。

〈活動の成果と評価〉

①成果

- ・ 骨折前は、認知症のために、帰宅願望があり、不穏になることが多かったが、個別対応が増えることにより、上記不安感を訴えることがなくなった。
- ・ 生活面では、離床時間の拡大することで、排便コントロールによる使いじりを防ぐことができ、クラブ活動への参加や、散歩、会話も増えてご本人の表情が明るく、且つしっかりされてきた。

②評価

- ・ PTの診断がない中でのケアの展開とリハビリのプログラムには、介護職員も不安を感じながら実践していたが、ご入居者とお互いに様子を見ながら行ったことにより、ADLの向上につながり、ケアの幅が広がった。
- ・ スタッフにおいて、1つ1つのケアが残存機能に結びついているという意識づけにつながった。

〈今後の課題〉

- OPTの判断がない状態での、取り組みであったため様子をみながら行い、約4ヶ月かった。ADLが回復することにより、車椅子からの立ち上がりや、ベッドからの転落、すり落ち等のリスクを考えながら行ったが、ケース会議、家族への説明などの流れを明確にしておくことが必要である。
- スタッフ主体での機能訓練であったため、医療との連携を強化が必要と考えられる。